

何か得体の知れぬもの



原 田 明

最近ではPM2.5, 2年前からはヨウ素, セシウム, ストロンチウム, ラジウム等放射性元素, 少し遡れば, メタミドフォス, もっと遡ってダイオキシンや内分泌攪乱物質, フロンガスや二酸化炭素等の化学物質, 長い歴史を有するヒ素やタリウム, カドミウムや水銀等の元素, アスベスト等の固体物質, 再び現在に戻って, 身近に溢れているものの影響が必ずしも明確ではない食品添加物や揮発性有機物質, 研究現場に溢れつつあるのはナノ物質, 等々。思うまま羅列しても, 分析対象となる化学種や物質は多様かつ多種で, 測定結果(分析結果)が, 社会を騒がせるのが常態と化しているように思える。

セシウムやヒ素, メタミドフォス等の極めて深刻なものと, 騒ぎ過ぎでどうかと思われるものと同列に扱うのも気が引けるが, 何にせよ, 分析の重要性は言うに及ばない。ただ, 「分析データは, (往々にして) 数字の一人歩きをする」のだ。だからこそだが, 分析データの取得や解析においては真摯でありたい。そして, 「分析には試料が必要である」ことを忘れたくはないものだ。一カギ括弧内は, 日本分析化学会編「基本分析化学」(朝倉書店, 2004年, ISBN4-254-14066-5, 22頁)より引用, 丸括弧内は追記—

上記, 昨年度末に“九州支部ニュース”の原稿依頼を受けて執筆した際に, PM2.5騒ぎに浮き立つマスメディアを眺めて持った雑感の加筆再録である。もちろん, このお祭り騒ぎで注目が集まり, 長く, ミクロ物質の分析化学に携わってきた技術者・科学者の努力が報われ, かつ, 新しいミクロ分析の技術が発展することを歓迎してもいたのではあるが, 一方で, 科学を知らない輩(としか思えない解説者, コメンテーター等々)のお気楽なコメントが目にも耳にも余るのが困りものとも感じての一筆。

言うまでもなく, 機器分析装置は進化を重ね, 驚くほど高感度かつ高度な分析情報を短時間で得られるようになってきている。先日は, 九州支部“分析化学若手の会”の“春の講演会”にて, 食品中の残留農薬やカビの産生物等の分析について話を伺う機会があった。測定すると少なからぬ問題化学種について未検出ということが, ほぼなく, 定量できる(できてしまう)とのこと。それが, 場合によっては, 問題となるレベルを遙かに下回っていても, 検出されたと言うだけで大騒ぎになり得る。

計れるのは良いが, 計った結果は一人歩きして“何か得体の知れぬもの”を醸造する室となり得る。“何か得体の知れぬもの”への不安を商売に結びつけるのが, あらゆる場面で悪いとは私には言い切れないものの, 徒に不安を煽る輩に対しては, 科学的な立場から真摯かつ有意義な見識を示し, 諫めていくのが公益に適う行動であるに違いない。公益社団法人日本分析化学会にも期待するところである。

[Akira HARATA, 九州大学大学院総合理工学研究院, 日本分析化学会九州支部長]